

# クリスタリン表現に対応する $(\varphi, \Gamma)$ -加群について

渡部匠

東京大学大学院数理科学研究科修士2年

## 修士論文の要旨

$p$ 進ガロア表現と $\tilde{\mathbb{A}}_K$ 上の $(\varphi, \Gamma)$ -加群の圏同値において、 $p$ 進ガロア表現の特別なクラスであるクリスタリン表現に対応する $\tilde{\mathbb{A}}_K$ 上の $(\varphi, \Gamma)$ -加群を特徴づけた。

この研究は数論に属する。数論とは整数 $\mathbb{Z}$ の性質を調べる分野。整数を調べる上では、実数体 $\mathbb{R}$ や $p$ 進数体 $\mathbb{Q}_p$ について考えると良い。

### $p$ 進数とは

$p$ を素数 $2, 3, 5, 7, 11, \dots$ のどれかとする。このとき $p$ 進整数環 $\mathbb{Z}_p$ とは

$$a_0 + a_1p + a_2p^2 + a_3p^3 + \dots \quad (a_i \text{ は整数})$$

の形で書けるもののこと。 $\mathbb{Q}_p$ はその商体。

$\mathbb{Q}_p$ は有理数全体 $\mathbb{Q}$ を含むことに注意。本研究は $(\mathbb{R}$ ではなく) $\mathbb{Q}_p$ に関するもの。

### 定義

$K$ を $p$ 進体(例えば $\mathbb{Q}_p$ やその有限次拡大),  $G_K$ をその絶対ガロア群とする。

$G_K$ の $p$ 進ガロア表現とは、有限次元 $\mathbb{Q}_p$ -線型空間 $V$ と $V$ への連続な $G_K$ の作用の組のこと。

$G_K$ の自由 $\mathbb{Z}_p$ -表現とは、有限生成自由 $\mathbb{Z}_p$ -加群 $T$ と $T$ への連続な $G_K$ の作用の組のこと。

$p$ 進ガロア表現や自由 $\mathbb{Z}_p$ -表現に対する主要な理論として、J.-M. Fontaineによる $(\varphi, \Gamma)$ -加群の理論がある。以下、自由 $\mathbb{Z}_p$ -表現について述べる。

### Notation

$K$ を $p$ 進体,  $k$ をその剰余体とする。 $K_0 := W(k)[1/p]$ とする。 $\bar{K}$ を $K$ の代数閉包とし、その完備化を $\mathbb{C}_p$ とする。 $K_\infty := \bigcup_{n=1}^{\infty} K(\zeta_{p^n})$ を $K$ の $p$ -円分拡大とする。 $G_K := \text{Gal}(\bar{K}/K)$ ,  $H_K := \text{Gal}(\bar{K}/K_\infty)$ ,  $\Gamma_K := \text{Gal}(K_\infty/K)$ とおく。 $K_\infty$ の完備化の整数環を $\mathcal{O}_{\bar{K}_\infty}$ とし、そのtiltを

$$\mathcal{O}_{\bar{K}_\infty}^b := \varprojlim_{x \rightarrow x^p} \mathcal{O}_{\bar{K}_\infty} / p\mathcal{O}_{\bar{K}_\infty}$$

とおき、 $\widehat{K}_\infty^b$ をその商体とする。 $\mathcal{O}_{\mathbb{C}_p}, \mathcal{O}_{\mathbb{C}_p}^b, \mathbb{C}_p^b$ も同様に定める。

$$\tilde{\mathbb{A}}_K := W(\widehat{K}_\infty^b), \quad \tilde{\mathbb{A}}_K^+ := W(\mathcal{O}_{\bar{K}_\infty}^b), \quad A_{\text{inf}} := W(\mathcal{O}_{\mathbb{C}_p}^b)$$

とおく。更に $\epsilon := (1, \zeta_p, \zeta_{p^2}, \dots) \in \mathcal{O}_{\bar{K}_\infty}^b$ ,  $\mu := [\epsilon] - 1 \in \tilde{\mathbb{A}}_K^+$ ,

$\xi := \mu/\varphi^{-1}(\mu) \in \tilde{\mathbb{A}}_K^+$ とおく。

Fontaineはフロベニウス写像と $G_K$ の作用で安定な部分環 $\mathbb{A}_K \subseteq W(\mathbb{C}_p^b)$ を構成した。 $\mathbb{A}_K$ への $H_K$ の作用は自明なので、特に $\Gamma_K$ が作用している。 $K$ が絶対不分裂、つまり $K = K_0$ の場合は $\mathbb{A}_K = W(k)((\mu))_p^\wedge$ となる。

### 定義

$\mathbb{A}_K$ 上の $(\varphi, \Gamma)$ -加群とは

- 有限生成自由 $\mathbb{A}_K$ -加群 $M$
- $M$ への連続かつ半線型な $\Gamma_K$ の作用
- $\mathbb{A}_K$ -線型同型写像

$$\Phi_M: M \otimes_{\mathbb{A}_K, \varphi} \mathbb{A}_K \cong M$$

であって、 $\Gamma_K$ の作用と整合的なものの組のこと。

$G_K$ の作用に比べて $\Gamma_K \hookrightarrow \mathbb{Z}_p^\times$ の作用は遥かに簡単なため、 $\mathbb{A}_K$ 上の $(\varphi, \Gamma)$ -加群は $G_K$ の自由 $\mathbb{Z}_p$ -表現よりも遥かに単純なものである。しかし、これらの圏が圏同値になるというのがFontaineの定理である。

### 定理 [Fon90, Théorème 3.4.3.]

$$\begin{array}{ccc} \mathbb{A}_K \text{ 上の } (\varphi, \Gamma)\text{-加群} & \xrightarrow{\text{圏同値}} & G_K \text{ の自由 } \mathbb{Z}_p\text{-表現} \\ \cup & & \cup \\ M & \xrightarrow{\quad} & (M \otimes_{\mathbb{A}_K} W(\mathbb{C}_p^b))^{\varphi=1} \\ & & \downarrow \\ & & (T \otimes_{\mathbb{Z}_p} W(\mathbb{C}_p^b))^{H_K} \longleftarrow T \end{array}$$

$p$ 進ガロア表現の中でも数論で重要となるクラスがいくつかある。そのうちクリスタリン表現について考える

### 修士論文で扱う問題

クリスタリン表現に対応する $(\varphi, \Gamma)$ -加群とはなにか？

この問題はFontaine, Wach, Colmezの研究をもとに、 $K$ が絶対不分裂の場合はBerger([Ber04])が定めたWach加群によってひとつの答えが出た。

$\tilde{\mathbb{A}}_K^+ := W(k)[[\mu]] \subseteq \mathbb{A}_K$ とおく。このときWach加群とは、

- 有限生成自由 $\tilde{\mathbb{A}}_K^+$ -加群 $N$
- $N$ への連続かつ半線型な $\Gamma_K$ の作用であって、 $N/\mu$ で自明となるもの
- $\tilde{\mathbb{A}}_K^+[1/\varphi(\xi)]$ -線型同型写像

$$\Phi_N: N \otimes_{\tilde{\mathbb{A}}_K^+, \varphi} \tilde{\mathbb{A}}_K^+[1/\varphi(\xi)] \cong N[1/\varphi(\xi)]$$

であって、 $\Gamma_K$ の作用と整合的なもの

の組のことである。BergerはこのWach加群がなす圏と $G_K$ の自由クリスタリン $\mathbb{Z}_p$ -表現のなす圏が圏同値であることを示した。 $N$ をWach加群とし対応する自由 $\mathbb{Z}_p$ -表現を $T$ とおくと、 $T$ に対応する $\mathbb{A}_K$ 上の $(\varphi, \Gamma)$ -加群は $N \otimes_{\tilde{\mathbb{A}}_K^+} \mathbb{A}_K$ で与えられる。つまりBergerは、クリスタリン表現に対応する $(\varphi, \Gamma)$ -加群を、特別な条件を満たす $\tilde{\mathbb{A}}_K^+$ -格子の存在によって特徴付けた。

→ $K$ が絶対不分裂という条件は強いので、一般の $p$ 進体に拡張したい。

### 問題点

$K$ が分裂している場合は、 $\tilde{\mathbb{A}}_K^+$ の構成が知られていない。

そこで $\mathbb{A}_K$ 上の $(\varphi, \Gamma)$ -加群ではなく、 $\tilde{\mathbb{A}}_K := W(\widehat{K}_\infty^b)$ 上の $(\varphi, \Gamma)$ -加群を用いる。この場合 $\tilde{\mathbb{A}}_K^+$ の代わりに $\tilde{\mathcal{O}}_{\bar{K}_\infty}^b := W(\mathcal{O}_{\bar{K}_\infty}^b)$ が使える。修士論文の結果を述べる。

### 定義

- $q_\infty := \{[a]x \in \tilde{\mathbb{A}}_K^+ \mid a \in \mathfrak{m}_{\bar{K}_\infty}^b, x \in \tilde{\mathbb{A}}_K^+\}$ 。但し $\mathfrak{m}_{\bar{K}_\infty}^b$ は $\mathcal{O}_{\bar{K}_\infty}^b$ の極大イデアル。
- $p$ -捩れ元を持たない $W(k)$ -加群 $M$ , 半線型準同型写像 $\varphi: M \rightarrow M[1/p]$ に対し、 $M_{\varphi\text{-fin}} := \{x \in M \mid \dim_{K_0} \langle \varphi^n(x) \rangle : n \in \mathbb{Z}_{\geq 0} \rangle_{K_0} < \infty\}$ と定める。

### 定義

$\tilde{\mathbb{A}}_K^+$ 上のクリスタリン $(\varphi, \Gamma)$ -加群とは

- 有限生成自由 $\tilde{\mathbb{A}}_K^+$ -加群 $N$
- $N$ への連続かつ半線型な $\Gamma_K$ の作用
- $\tilde{\mathbb{A}}_K^+[1/\varphi(\xi)]$ -線型同型写像

$$\Phi_N: N \otimes_{\tilde{\mathbb{A}}_K^+, \varphi} \tilde{\mathbb{A}}_K^+[1/\varphi(\xi)] \cong N[1/\varphi(\xi)]$$

であって、 $\Gamma_K$ の作用と整合的なものの組であって、次の条件を満たすものこと。

- $(N/\mu)^{\Gamma_K}$ は有限生成射影 $(\tilde{\mathbb{A}}_K^+/\mu)^{\Gamma_K}$ -加群であって、自然な写像

$$(N/\mu)^{\Gamma_K} \otimes_{(\tilde{\mathbb{A}}_K^+/\mu)^{\Gamma_K}} \tilde{\mathbb{A}}_K^+/\mu \rightarrow N/\mu$$

は同型。

- $(N/q_\infty)^{\Gamma_K}_{\varphi\text{-fin}}$ は有限生成自由 $W(k)$ -加群であって、自然な写像

$$(N/q_\infty)^{\Gamma_K}_{\varphi\text{-fin}} \otimes_{W(k)} \tilde{\mathbb{A}}_K^+/q_\infty \rightarrow N/q_\infty$$

は同型。

### 主定理

$$\begin{array}{ccc} \tilde{\mathbb{A}}_K^+ \text{ 上のクリスタリン } (\varphi, \Gamma)\text{-加群} & \xrightarrow{\text{圏同値}} & G_K \text{ の自由クリスタリン } \mathbb{Z}_p\text{-表現} \\ \cup & & \cup \\ N & \xrightarrow{\quad} & (N \otimes_{\tilde{\mathbb{A}}_K^+} W(\mathbb{C}_p^b))^{\varphi=1} \end{array}$$

Wach加群と同様に、 $\tilde{\mathbb{A}}_K^+$ 上のクリスタリン $(\varphi, \Gamma)$ -加群 $N$ と対応する $G_K$ の自由クリスタリン $\mathbb{Z}_p$ -表現 $T$ に対して、 $N \otimes_{\tilde{\mathbb{A}}_K^+} \tilde{\mathbb{A}}_K^+$ は $T$ に対応する $\mathbb{A}_K$ 上の $(\varphi, \Gamma)$ -加群となる。つまりクリスタリン表現に対応する $\tilde{\mathbb{A}}_K^+$ 上の $(\varphi, \Gamma)$ -加群を、特別な条件を満たす $\tilde{\mathbb{A}}_K^+$ -格子の存在によって特徴付けた。

証明には[BS23]の結果である。 $G_K$ の自由クリスタリン $\mathbb{Z}_p$ -表現のなす圏と $\mathcal{O}_K$ 上の絶対プリズマティック $F$ -クリスタルのなす圏の圏同値を用いる。具体的には、 $\mathcal{O}_K$ 上の絶対プリズマティック $F$ -クリスタル $\mathcal{N}_\Delta$ に対し、 $\mathcal{N}_\Delta(\tilde{\mathbb{A}}_K^+, \varphi(\xi))$ が $\tilde{\mathbb{A}}_K^+$ 上のクリスタリン $(\varphi, \Gamma)$ -加群であることを示し、擬逆関手を構成した。

$$\begin{array}{ccc} \text{Mod}_{\varphi, \Gamma}^{\text{ét}}(\tilde{\mathbb{A}}_K^+) & \xrightarrow[\cong]{\text{[Fon90]}} & \text{Rep}_{\mathbb{Z}_p}(G_K) \\ \uparrow \otimes_{\tilde{\mathbb{A}}_K^+} \tilde{\mathbb{A}}_K^+ & \circlearrowleft & \uparrow \\ \text{Mod}_{\varphi, \Gamma}^{\text{fh, crys}}(\tilde{\mathbb{A}}_K^+) & \xrightarrow{\text{主定理}} & \text{Rep}_{\mathbb{Z}_p}^{\text{crys}}(G_K) \\ \downarrow \text{evaluate at } (\tilde{\mathbb{A}}_K^+, \varphi(\xi)) & \circlearrowleft & \downarrow \text{[BS23]} \\ & \text{Vect}^\varphi(\mathcal{O}_{K, \Delta}, \mathcal{O}_\Delta) & \end{array}$$

### 今後の展望

- semi-stable表現やde Rham表現に対応する $\tilde{\mathbb{A}}_K$ 上の $(\varphi, \Gamma)$ -加群の特徴付け
- 主定理を他の問題へ応用

### 参考文献

- Laurent Berger, *Limites de représentations cristallines*, Compos. Math. **140** (2004), no. 6, 1473–1498. MR 2098398
- Bhargav Bhatt and Peter Scholze, *Prismatic  $F$ -crystals and crystalline Galois representations*, Camb. J. Math. **11** (2023), no. 2, 507–562. MR 4600546
- Jean-Marc Fontaine, *Représentations  $p$ -adiques des corps locaux. I*, The Grothendieck Festschrift, Vol. II, Progr. Math., vol. 87, Birkhäuser Boston, Boston, MA, 1990, pp. 249–309. MR 1106901